

(感想) 生田緑地の野鳥 第1次～第7次調査の自然の変化

Natural Transition from the First to Seventh Survey of Wild Birds in Ikuta Ryokuchi Park

佐野悦子

Etsuko Sano

第1次川崎市自然環境調査の頃から比較すると、林の木も大きく成長し、緑も濃くなってきた。第1次川崎市自然環境調査における出現種類数は30種であったが、第3次川崎市自然環境調査の頃から種類数が増え、1992年以降は年間40～50種が確認されるようになった。また2000年4月～2004年3月にホテルの里が整備され、飛来する鳥の種類、数などに変化が現れた。確認された種数が増えた理由は観察する人が増えたこと、定例調査以外に生田緑地で鳥を見るようになったことなどがあげられる。次に変化のあった種を取り上げた。

(タカ科・ハヤブサ科)

留鳥のオオタカ(準絶滅危惧 NT)の他、冬鳥のノスリも含め6種確認されている。上空を飛ぶ際の確認が多い。

(留鳥)

カルガモは奥の池、ホテルの里などで確認されている。ホテルの里に田圃が再生された2004～2006年頃から、見られる頻度が高くなった。キジはゴルフ場で放鳥されていたのがいなくなり、2004年以降の確認は無い。アオゲラ、ヤマガラなどは第1次川崎市自然環境調査では珍しかったが、第3次川崎市自然環境調査以降定例調査でも確認されるようになった。ウグイスは第1次川崎市自然環境調査を始めた頃の繁殖期にはあまり確認されなかったが、調査2年目以降繁殖期にも確認されている。第1次川崎市自然環境調査を開始した頃は、ハシボソガラスが年間12回の定例調査中11回において確認され、ハシブトガラスは年間6回に止まっていたのだが、第3次川崎市自然環境調査以降、生田緑地内では殆どハシブトガラスになった。ハシボソガラスは今でもゴルフ場では多く見られる。コジュケイは第1次川崎市自然環境調査の頃は良く声が聞こえたが、第6～7次川崎市自然環境調査では声の聞こえる回数が減ってしまった。環境省指定特定外来生物のガビチョウは2002年までは出現していなかったが、2003年以降調査時に何度か出現するようになり、現在では殆ど毎日鳴き声を確認できるようになっている。

(夏鳥)

ホトトギスは1992年頃より確認されるようになり、定例調査でも2003年から確認されるようになった。ウグイスに託卵していると思われる。

(冬鳥)

トラツグミは第1次川崎市自然環境調査では確認されなかったが、1991年以降時々確認されている。アカハラは3月、4月に出現している。シロハラは第1次川崎市自然環境調査では確認されなかったが、1991年以降毎年、越冬が確認されている。ツグミは明るいところを好み、毎年つつじ山などで確認されることが多い。カシラダカはホテルの里で未整備の際に多くの個体が確認されたが、整備後一時は殆ど確認されなくなったものの、2006年より再び確認され始めた。アオジは毎年越冬しているが、2009年は出現頻度が少なくなっている。シメは1986年、1987年には少なかったが、1992年より越冬期には毎回見ることができた。カケスは多く飛来する年と少ない年が2～3年の周期であるが、2007～2009年は飛来が少ない状態が続いている。

(通過鳥)

春秋の渡りの季節に通過していく鳥は滞在期間が短いものが多く、定例調査では確認されにくい。キビタキ、オオルリは1986年、1987年には確認されていないが、キビタキは1991年以降、オオルリは1992年以降、定例調査で確認されている。オオルリは2～3度繁殖も確認されている。キビタキも2007年に幼鳥が確認された。エゾビタキ、サメビタキ、コサメビタキなどは2008年、2009年につつじ山でよく観察された。

著者紹介

佐野悦子 特定非営利活動法人かわさき自然調査団 野鳥班班長